

2020年3月15日

「はじめのキリスト教」説教要約

自分の十字架を負って

(マルコ8・31〜35)

一、主イエスを信じるなら

イエスキリストを信じたなら、どのようになるのでしょうか。心が平安になるのでしょうか？ そのとおりかと思えます。天地万物を造られた神さまが分かるようになるのでしょうか？ そのとおりかと思いません。ですが、神という存在はあまりにも大きく、分かったななどというのはおおがましいです。そうは言いませぬ、神は善いお方で、信頼できるお方であると信じる事ができるようになります。そして、教会生活を続けますと、天地万物を造られた神がたしかにイエス・キリストによって語っておられると、確信を持つことができるようになります。

今申し上げたことは、いずれも神の御意思に適った発言であると信じます。そういう思いを持って、きょう開かれた聖書の言葉をご覧くださいと思います。

二、救い主イエス・キリスト

31節をご覧ください。《それからイエスは、人の子は多くの苦しみを受け、長老たち、祭司長たち、律法学者たちに捨てられ、殺され、三日後によみがえらな

ければならないと、弟子たちに教え始められた。》とあります。だれが語ったのでしょうか。イエスキリストです。そうしますと、次のように思うのではないのでしょうか。神であられるお方が、どうして苦しみを受けなければならなかったのか、と。神であられるお方が、なぜ長老たち、祭司長たち、律法学者たちという時の宗教指導者たちから捨てられなければならないか、と。神であられるお方が、なぜ殺されなければならなかったのか、と。弟子たちも同じようなことを思ったはずですが。

ペテロは行動に出ました。32節に「するとペテロは、イエスをわきにお連れして、いさめ始めた。》とあります。ですが、キリストが苦しみを受け、殺されるのは、神の御意思でした。そこで、主イエスは語られました。33節です。《しかし、イエスは振り向いて弟子たちを見ながら、ペテロを叱って言われた。『下がれ、サタン。あなたは神のことを思わないで、人のことを思っている。』》と。

イエスキリストは人となられた神です。神であり、人であるお方が、神の御意思に副って自分から十字架の道を歩まれ、殺され、よみに下る道を選ばれました。なぜでしょうか。私たちが救われるためです。万物を造られた神は、すなわち父・子・聖霊なる神は、聖なるお方です。この聖なるお方と交わるためには、アダムにおいて入ってきた罪の

問題が解決される必要があります。そうでなければ、罪人である私たちは、聖なる神と交わることができません。キリストは私たちが救われるために、私たちが受けなければならぬ、聖なる神からの罰を受けてくださいました。こうして、神の恵みが実現する道が備えられました。

三、自分の十字架を負う

34節をご覧ください。《それから、群衆を弟子たちと一緒に呼び寄せて、彼らに言われた。『だれでもわたしに従って来たければ、自分を捨て、自分の十字架を負って、わたしに従って来なさい。』》と書かれています。主イエスが語られたのは、だれに対してでしょうか。群衆と弟子たちです。《群衆を弟子たちと一緒に呼び寄せて、彼らに言われた》と書かれているからです。福音書が語る「群衆」とは、自分の考えを持たず、だれかの発言に流されて行く存在です。ですが、神が人となられたイエスキリストは、「群衆」に対しても語られたのです。

こういうわけで、34節の《だれでもわたしに従って来たければ、自分を捨て、自分の十字架を負って、わたしに従って来なさい》は、「群衆」に対しても語られた言葉であったということになります。すなわち、イエスキリストに興味のある人たち、キリスト教に関心のある人たちに對しても語られたことにな

ります。この言葉は、きょうここに集まっている私たちに對しても語られています。『だれでもわたしに従って来たければ、自分を捨て、自分の十字架を負って、わたしに従って来なさい』と。

では、「自分を捨て、自分の十字架を負う」とは、どういう意味なのでしょう。か。《一緒に考えてみたいと思います。『自分を捨てる』とは「自分の十字架を負う」ことです。一人ひとりの人生には自分が背負うことになる、宿命のような重荷があると思われれます。

一方で、生まれながらの人は、「自分を捨て、自分の十字架を負う」ことをいとい、自分があがめられるの喜びがあります。自分が脚光を浴びるのを快く思います。そういう私たちに對して、主イエスは語られています。35節です。《自分のいのちを救おうと思おう者はそれを失い、わたしの福音のためにいのちを失う者は、それを救うのです。》と。神が備えられた人生を楽しむのは良いことです。ですが、自分の幸福だけを追求しますと、それを失うことになります。

では、どうしたらよいのでしょうか。イエスキリストを知り、信じ、従うことです。神がくださるいのちに生かされる、「私が、私が」と自己主張するいのちが衰え、「神に栄光あれ」と願ういのちに変えられます。